

二〇二二年度

二月三日午後入試（第五回）

国語（45分）

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんに、はつきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、5－1から5－10まであります。

一 次のⅠ・Ⅱ・Ⅲの文章を読んで、後の問いに答えなさい。(Ⅰは最初に書かれた『神様』の書き出しの部分です。Ⅱは二〇一一年に新たに書かれた『神様 2011』の書き出しの部分です。Ⅲは同じ作者による二〇二一年に書かれた文章です。字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

I

くまにさそわれて散歩に出る。川原に行くのである。歩いて二十分ほどのところにある川原である。春先に、^{※しぎ}鴨を見るために、行ったことはあったが、暑い季節にこうして弁当まで持っていくのは初めてである。散歩というよりハイキングといったほうがいいかもしれない。

くまは、雄の成熟したくまで、だからとても大きい。三つ隣の305号室に、つい最近越してきた。^①ちかごろの引越しには珍しく、引越し蕎麦を同じ階の住人にふるまい、葉書を十枚ずつ渡してまわっていた。ずいぶん気の遣いようだと思ったが、くまであるから、やはりいろいろとまわりに対する配慮が必要なのだろう。

ところでその蕎麦を受け取ったときの会話で、くまとわたしとは満更赤の他人というわけでもないことがわかったのである。

表札を見たくまが、

「もしや某町のご出身では。」

と訊ねる。確かに、と答えると、以前くまがたいへん世話になった某君の叔父という人が町の役場助役であつたという。その助役の名字がわたしのものと同じであり、たどってみると、どうやら助役はわたしの父のまたいとこに当たるらしいのである。あるか無しかわからぬような繋がりであるが、くまはたいそう感慨深げに「縁」というような種類の言葉を駆使していろいろと述べた。どうも引越しの挨拶の仕方といい、この喋り方といい、昔気質のくまらしいのではあつた。

(川上弘美『神様』より)

※(注) 鴨 シギ科の鳥。

某町・某君 「某」は場所や人の名前などがわからない場合、またははっきりさせたくない場合に使う言葉。

役場助役 役場は町村の役所。助役は役所の長を助けたり、代わって仕事を行ったりする人。

感慨深げに 深く身にしみて感じるさま。

縁 ゆかり。えん。

駆使 使いこなすこと。

昔気質 昔ながらの考え方や様式をしっかりと守ろうとする性質。

II

くまにさそわれて散歩に出る。川原に行くのである。春先に、鳴を見るために、防護服をつけて行ったことはあったが、暑い季節にこうしてふつうの服を着て肌をだし、弁当まで持っていくのは、「あのこと」以来、初めてである。散歩というよりハイキングといったほうがいいかもしれない。

くまは、雄の成熟したくまで、だからとても大きい。三つ隣の305号室に、つい最近越してきた。③ごろの引越しには珍しく、このマンションに残っている三世帯の住人全員に引越し蕎麦をふるまい、葉書を十枚ずつ渡してまわっていた。ずいぶん気の遣いようだと思ったが、くまであるから、やはりいろいろとまわりに対する配慮が必要なのだろう。

ところでその蕎麦を受け取ったときの会話で、くまとわたしとは満更赤の他人というわけでもないことがわかったのである。

表札を見たくまが、

「もしや某町のご出身では。」

と訊ねる。確かに、と答えると、以前くまが「あのこと」の避難時にたいへん世話になった某君の叔父という人が町の役場助役であつたという。その助役の名字がわたしのものと同じであり、たどってみると、どうやら助役はわたしの父のまたいとこに当たらしいのである。あるか無しかわからぬような繋がりであるが、くまはたいそう感慨深げに「縁」というような種類の言葉を駆使していろいろと述べた。どうも引越しの挨拶の仕方といい、この喋り方といい、昔気質のくまらしいのではあつた。

(川上弘美『神様 2011』より)

III

二十七年前、「神様」という短いお話を書いた。マンションの隣に越してきた「くま」に誘われ、川まで散歩に行く話である。なにしろくまであるので、川辺で子供にキックをくらったり、人の世界に合わせているつもりにもかかわらず、思わず野性がもれてしまったりする、そんな話だった。

書いた当時は、専業主婦として二人の子供を育てており、幼稚園に入ってから二語文の出なかった息子のことで悩んでいた。専門の医院にも通い、よいと言われることはすべておこなうよう試みていたが、息子は言葉を口にできなかった。お砂場遊びをしても、息子だけが「ふつうのこども」ではなくて、④周囲とまじわれないわたしと息子は、まるで異世界からきた存在のようだった。

「神様」は、ある日突然思いつき、一時間ほど書き上げた話なのだが、おそらく当時の息子と自分が、世界からずれた場所にいる、という感覚を、小説の中に解放したものだ。とはいえ、ずれた場所にいるのは、必ずしも不幸なことではない、ということも、ひっそりと主張したかったはずで、ただ、そのようなことを自分が無意識に思っていたということに気がついたのは、後年だったのだが。

その「神様」を、東日本大震災の一週間後に書き直したものが「神様2011」である。隣の部屋に越してきた「くま」に誘われ、川まで散歩に行くところはまったく同じだが、「2011」の世界は、⑤「あのこと」の後の世界であり、放射性物質が空気の中に飛び散り、人々は防護服をまとい、日々除染がおこなわれているのだ。「福島第一原発の事故」と明記せず、「あのこと」と表現したのは、狭い国土にこれだけ多くの原発

が建設されている限り、今後も事故が起こる可能性はいくらでもあると思ったからだ。福島原発の事故は、福島だけのものではなく、わたしたちすべてにふりかかる可能性のあるできごとなのである、と。

東日本大震災による福島第一原発のメルトダウンは、当初どのくらいの範囲に放射性物質を飛散させるか、まったくわかっていなかった。冷却用の電源が失われ、メルトダウンが起こり、ベントがおこなわれ、水素爆発が建屋を吹き飛ばし、原発内部の様子を詳細には知ることができず、ヘリコプターや消防車からの水の投下と放水をおこなうしかなかった、事故後の数日間。当時の政府は「最悪のシナリオ」を想定しており、大震災の翌年に初めて開示されたのだが、それによれば、最悪の場合は東京の住民も移住の対象となる可能性があったという。

当時の自分の感情は、今もありありと覚えている。建屋の水素爆発の映像をテレビで見ながら、「東京もきつとだめだろう……。」と、漠然と思っていた。それならば自分はいったい、どうするのだろう。チエル・ブイリの人々が土地を離れざるを得なかったのと同じく、東京を離れるしかないのだろうか。もしそうだとすると、生まれ育った土地に、いつか帰りたい。そんなふうに感じながら、地震が起こった次の週に「神様2011」を書いたのである。

日常は、ある日突然、取り返しようにも変化してしまうものなのだなあ、というのが、当時いちばん強く感じたことだった。あれから十年。東京に住まうわたしは、結局避難をおこなうこともなく、地震の被害もほとんど受けず、震災の数カ月後には「変化した日常」ではなく、「元と同じ日常」を送るようになる。「神様2011」を書いた震災の一週間後は、自分は原発事故の「当事者」だと思っていた。けれどいつの間にかわたしは「当事者」ではなくなり、「傍観者」となっていたのである。

震災のことを思うたび、申し訳ない、と思う。けれど、いったい何に對して？

もちろん、すべてに對してだ。震災と原発事故で傷を負った方々に何もできない自分に対して。同時に、自分が何の役にも立たないと嘆く自己憐憫ともいえる気分に対して。どこまでいっても、自分は当事者の方々の傷を真に理解できないことに対して。そして何より、傍観者として今ここで生きていることに対して。自分をそんなに責めること自体、自意識過剰だし、自分のことを「なにさま」と思っているのか、である。けれどやはり今も、わたしは「申し訳ない」と思わずにはいられない。

いつでも、生を享受している者は、「申し訳ない」のだ。亡くなった友を思う時、難民として生まれた土地を離れた人を使う時、戦火のもとにいる人を使う時、病に苦しむ人を使う時、悩みにおしひしがれている人を使う時、つねにわたしは申し訳なく思う。

申し訳ない、という心もちは、たいへんに居心地が悪い。なぜならその心もちは、明らかに「申し訳ない」と自分が感じている相手やものごとよりも、自分の方がめぐまれているために起こってくるからだ。めぐまれている、といったって、偶然だけが、今いるこの境遇をつくってきたのだ。自分が努力を積み重ねた結果で、めぐまれたのではない。おかたのことは、たまたま、なのだ。たまたま、そこにいたから。たまたま、そこにいなかったから。

考えてみれば、人生の中で自分で差配できることなんて、ほんのわずかしかない。たとえ自分で刻苦勉励努力に努力を重ねてきた結果何かを得たのだとしても、そこにはそもそも「努力を重ねる」ことのできる幸運が与えられていただけだったのではないだろうか。努めてきたつもりのことさえ、偶然の幸運がもたらしてくれたものの一部なのだと、年を重ねるごとに強く感じる。

なかなか、困難ではある。考えれば考えるほど、途方に暮れてしまう。

いや、考える、などと書いたけれど、申し訳なさを直視することは、実はいへんに難しいし、つらいこ

となのだ。だから、正直に打ち明けるなら、一日のうちでわたしが「申し訳ない」ことに關してしっかりと考え直視するのは、ほんのわずかな時間でしかない。拭き掃除ふきそうじをしている合間の、数分。近所の猫ねこに、いやあと話しかけて逃げられたその直後の数十秒。小説を書きあぐねている数分。読んでいる本の一つの言葉の前で立ち止まっている十数分。寝入りばなの、あの伸び縮みするわずかだけれど永遠のような短い数分。

そうやって、こまぎれに直視することしか、今もわたしはできない。こまぎれ+こまぎれ+こまぎれ。そのようにして、この十年間、ようよう、東日本大震災だいしんさいや原発げんぱつのことを考えてきた。二十六年間、ようよう阪神大震災や地下鉄サリン事件のことを考えてきた。六十二年間、ようよう自身の内側にある闇やうつすらとした光のことを考えてきた。そしてこの一年は、ようよう、コロナ禍かのことを考えてきたのである。

たとえば、「傷を負った人たち」などという概念がいねんで何かを考えはじめたとたんに、その人たちはほんやりとしたもやもやになってしまう。いや、あくまでわたしの場合は、ということなのだが。その、ほんやりとしたもやもやに手を伸ばそうとしても、ふれることはできない。「損そこなわれた場所」などと考え始めた時も、一緒だ。それはきつと、あちらの遠くにある場所で、いつか行ったこともあるはずなのに、輪郭りんかくを失ってしまふのだ。

わたしが誰か、あるいはどこかにふれることができるのは、たとえばその人の好きな食べものを知っている時、その人の声の調子を思いだせる時、会ったことはなくともその人のことを能く描写びようしゃした文章を読んだ時だけなのである。その場所に住む人を知っている時、その場所にある川の匂においをかいだことがある時、その場所への傾斜けいしゃを自分の足で地面に感じたことがある時、その場所のことを何回も本で読んだことがある時、だけなのである。

⑨ 直視し、ずっと考え続けることができるのは、自分の場合は、概念的な対象ではないのだと思う。概念的な対象は、その大きさのあまり、考え続けようとする気持ちをはね返す。そして、それでoshiまい。解決していないのに、まるで解決されてしまったかのように。

けれど概念ではない、わたしがたしかにいつか知ったことのある人、あるいはいつか知っていた場所の問題は、決してかんとんにはわたしを離さない。そしてまた、解決もされない。なぜなら、それらは個々の問題であるからだ。ある人の苦しみは、ほかの誰にもわからない。ある場所の困難は、ほかのどの場所の困難とも替かえることはできない。わたしの苦しみはわたしの苦しみであって、本質的には A

解決できないことをこまぎれに考えつづけること。

たぶんわたしにできるのは、それだけなのだ。

「神様」も「神様2011」も、共に書き出しは、「くまにさそわれて散歩に出る。」という一文である。新型コロナウイルスが世界中を席卷※せつけんしはじめてから、ほぼ一年がたった。この一年の散歩の回数は、今まで生きてきた中で、いちばん多い。けれど、新型コロナのもとでは、くまは気軽にわたしを誘さそえない。だから、「神様2020」を書くとしたら、書き出しの一文はただ、「 B 」となるだろう。

息子むすこと自分が、世界からずれた場所にいると感じつつ書いた小説から二十七年たった今、新型コロナのもとでの生活は、すべての人たちが、それぞれ少しずつ世界からずれた場所にいるかのようだ。ずれた場所にいるのは、必ずしも不幸なことではない、ということも、今もわたしはひっそりと主張できるだろうか。そのことも、これから先、こまぎれに、こまぎれに、考えつづけよう。解決はできないけれど、散歩の途中ちゅうちゆうで、猫に逃げられながら、共に歩くことのできないくまのことを思いながら、ずっと考えつづけよう。

※(注) 除染

放射性物質が散らばったために、放射性物質が付着した物を取り除いたり、土などで覆ったりする作業。

メルトダウン 原子炉の炉心の温度が上昇して、核燃料が液体になり、圧力容器の底にたまった状態のこと。

ベント 原子力発電所の原子炉圧力容器内の圧力が急上昇した際に、内部の蒸気を放出し、圧力を下げること。

建屋 ここでは原子炉がある建物。

チェルノブイリ 旧ソ連（現ロシア）の地名。そこに原子力発電所があり、一九八六年に発電所事故が起きた。

自己憐憫 自分をかわいそうに思うこと。

享受 受け入れること。

おしひしがれている おしつぶされている。

境遇 人が置かれている立場や環境。

差配 指示して取り仕切ること。

刻苦勉励 力をつくしたいへんな苦勞をして物事にはげむこと。

概念 多くの物事から似たところを取り出してつくられる考えのまとめ。

席卷 激しい勢いで自分の勢力範囲に収めること。

問一

Ⅰの文章の 中の「くまにさそわれて散歩に出る。ハイキングといったほうがいいかもしれない。」と、Ⅱの文章の 中の「くまにさそわれて散歩に出る。ハイキングといったほうがいいかもしれない。」について、ⅠとⅡの 中のちがいを比べた次の各文の a～d にあてはまる言葉を、文中からそれぞれ a は二十字、b は七字、c は十二字、d は八字でぬき出して答えなさい。

ⅠとⅡで、以前春先に鳴を見に川原に行ったことがあると言っている点は共通しています。また、今、暑い季節になりくまにさそわれて、川原に散歩に出かける点も共通しています。

しかし、ⅡにはⅠの中の a という川原の説明の部分がありません。

一方、Ⅱには次の服装の部分が加わっています。春先に行ったときは b とあり、今度の暑い季節では c た姿で行ったとあります。

そして、弁当を持っていくのはⅠとⅡで共通していますが、Ⅱには d 初めてのことであります。

問二——線①「ちかごろのく渡してまわっていた。」と——線③「ちかごろのく渡してまわっていた。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1——線①「ちかごろのく渡してまわっていた。」と——線③「ちかごろのく渡してまわっていた。」について、——線①では「引越^こし蕎麦^{そば}を同じ階の住人にふるまい」とあり、——線③では「このマンションに残っている三世帯の住人全員に引越^こし蕎麦^{そば}をふるまい」とあります。Ⅰは「あのこと」が起きていない世界です。Ⅱは「あのこと」の後の世界をえがいています。作者はⅠからⅡをつくるときに、物語の中でどのような様子のちがいを表そうとしていますか。そのちがいについて、「あのこと」から始まる形で、「だれがどうした」という内容を入れて、最後が「という様子のちがいがあること。」で終わる一文で答えなさい。

2 Ⅱの物語の中で「あのこと」があつてから、「くま」はどのような行動をとったことが読みとれますか。「くま」のとった行動がわかる言葉を——線③よりも後の文中から、漢字三字でぬき出して答えなさい。

問三——線②「赤の他人」とありますが、「赤」を使う決まった言い方がほかにあります。次のア～エの中から、「赤」の入る言い方を一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 真っ□なうそ
- イ 真っ□な本当
- ウ 真っ□な笑い
- エ 真っ□なくせ

問四——線④「周囲とまじわれないわたしと息子^{むすこ}は、まるで異世界からきた存在のようだった。」とは、どういうことを言っているのですか。それを説明した次の文の□ 1・2にあてはまる言葉を、文中からそれぞれ六字以上十字以内でぬき出して答えなさい。

自分の息子が□ 1 ではなく、息子と自分が□ 2 にいるように感じられたということ。

問五——線⑤「あのこと」とありますが、筆者は「あのこと」が何かわかっているのに「あのこと」としたのはなぜだと言っていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「あのこと」は何度も日本で起きた事故であり、将来においてもくり返されると考えたから。
- イ 「あのこと」は多くの人が忘れていてできごとであり、はつきり話すことができなかったから。
- ウ 「あのこと」は狭い^{せま}国土の日本で起きた事故であり、将来も起こる可能性があると思ったから。
- エ 「あのこと」は自分には関係ないできごとであり、はつきり書かなくてもいいと判断したから。

問六 ――線⑥「わたしは『当事者』ではなくなり、『傍観者』^{ほうかんしゃ}となっていたのである。」とありますが、「傍観者」は「何もしないで離れた場所や立場で物事を見ている人」という意味です。「わたし」はどのようなことで「傍観者となっていた」のですか。それがわかる部分を、解答さんの「こと。」につながらるように、文中から十五字前後でぬき出して答えなさい。

問七 ――線⑦「申し訳ない、という心もちは、たいへんに居心地^{いこち}が悪い。」とありますが、「居心地が悪い」と感じているのは、自分の立場がどのようなものだからだと言っていますか。それがわかる言葉を、解答さんの「ほかよりも」 立場だから。」にあてはまるように、文中から五字以上十字以内でぬき出して答えなさい。

問八 ――線⑧「^{とほう}途方に暮れてしまう。」とありますが、「途方に暮れる」の意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 人の言っていることが理解できない。
- イ どうしたらよいかわからなくなる。
- ウ どちらにしようか迷ってしまう。
- エ どうにもならず人に助けを求める。

問九 ――線⑨「直視し、ずっと考え続けることができるのは、自分の場合は、概念的な対象^{がいねん}ではないのだと思う。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 「概念的な対象」とありますが、筆者はどのようなものを「概念的な対象」としてあげていますか。文中から十字以内で二つぬき出して答えなさい。
- 2 「直視し、ずっと考え続けることができる」とありますが、筆者が「考え続けることができる」わかりやすい例としてあげている二文続きの部分を文中からぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問十 Aにあてはまる表現を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア ^{だれ}誰かに助けてもらいたい
- イ 誰かが必ず助けてくれる
- ウ 誰かを助けることができない
- エ 誰にも助けてもらうことができない

問十一

□ Bにあてはまる文を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 旅に出る。

イ 散歩に出る。

ウ くまにさそわれる。

エ わたしにさそわれる。

問十二

——線⑩「新型コロナウイルスのもとの生活は、すべての人たちが、それぞれ少しずつ世界からずれた場所にいるかのようだ。」とありますが、筆者が「新型コロナウイルスのもとの生活」は、「それぞれ少しずつ世界からずれた場所にいるかのよう」に思うのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 新型コロナウイルスの感染で多くの人が亡くなり、いつ自分も死ぬかわからない恐怖の中でひっそりと生活していることに、さびしさを感じるようになってから。

イ 新型コロナウイルスがもたらした不安で危険な世界は、自分の命を守ることと精いっぱいになってしまい、他人の世話をすることもできないような状態をもたらしているから。

ウ 新型コロナウイルスが世界に及ぼした影響は長く続いており、各国はその感染対策に取り組んでいるにもかかわらず、感染被害が少なくならないことに人々は悩んでいるから。

エ 新型コロナウイルスによる感染不安のため、自宅で生活する時間が長くなり、それぞれが閉じられた世界で生活し、各自が周囲とまじわれない状態にあるような感覚が生まれているから。

問十三

Ⅲ □の本文の内容にあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 筆者が言う「申し訳ない」という思いは、被害者に対する同情からうまれた気持ちであり、あえて加害者の立場になって考えることで、災害の不幸を乗りこえようとしている。

イ 災害や事件についてその被害を受けた人のことを概念的な対象として考えると、筆者の頭の中ではほんやりとしたものになり、考え続けようとする気持ちをはね返してしまうことになる。

ウ 『神様』は筆者が子育てで悩んでいたときに生まれた作品であり、くまといっしょに散歩に出かけるが、くまであるから人の世界の中で思わず野性が出てしまうという話であった。

エ 筆者は解決のできない社会の問題や災害に対して、自分は傍観者で申し訳ないと思っても、こまぎれに考え続けていくという姿勢をとることで、誠実に被害者に向き合おうとしている。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 船は長いコウカイを終えて日本にもどった。
- ② 運動会は雨でジュンエンになった。
- ③ 大切な書類をホカンしておく。
- ④ 卒業式でハナタバをもらう。
- ⑤ 喜びイサんで家を出た。

問二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 額に流れる汗をふく。
- ② 彼はチームの第一線から退いた。
- ③ 事故のため車が立ち往生している。
- ④ 法律に反する取り引きが横行する。
- ⑤ 昨今の事情に通じている。

問三 次の①～④の慣用句を使った文として適当なものを、後のア～エの中から一つ選びその記号を答えなさい。

① 肩で風を切る

- ア あの作家の作風は、肩で風を切るといったとえがあてはまる。
- イ あの選手はどんなに逆風になっても、肩で風を切るのが得意だ。
- ウ あの先生の教え方は、肩で風を切る力をもっている。
- エ あの政治家は選挙に勝って、肩で風を切る勢いだ。

② 舌をまく

- ア 毎日あの人は、舌をまいて人々を説得していた。
- イ あの人の才能には、だれもが舌をまいていた。
- ウ あの人はどうにもできずに、舌をまいてにげだした。
- エ あの人の話はいつも楽しいので、舌をまいて喜んだ。

③ 手をこまねく

- ア 不安な毎日が続き、手をこまねくことで安らぎを得ていた。
- イ 被害の大きさを見るにつけ、ただ手をこまねくばかりだった。
- ウ どんなに連敗しても、コーチは手をこまねく指導を貫いた。
- エ 何事にも器用な姉は、手をこまねくやり方が得意だった。

④ かたずをのむ

- ア 私は試合のなりゆきを、かたずをのんで見守った。
イ 私は十年間かたずをのんで、つらさにたえてきた。
ウ 私は先生の言葉だけを、かたずをのんで信じてきた。
エ 私は相手にわかってもらえるように、かたずをのんで話した。

問四 次の①・②の文の——線部と同じ用法のものを、後のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

① 年をとると昔のことがしのばれる。

ア 母に久しぶりにほめられる。

イ 古い友に会い、幼い日のことが思い出される。

ウ 学校は駅から十分で行かれる。

エ 新しい校長先生が今日学校に来られる。

② 明日もまた雨が降るらしい。

ア 女らしい態度というのはどういう態度を言うのですか。

イ 桜が咲きほこり、めっきり春らしい陽気になった。

ウ たいへんめずらしい花を見つけて娘は喜んでいた。

エ 両親も五分後には家を出るらしい。

問五 次の①～④の文の言葉の使い方が正しければ○、間違っていれば×を解答らんに書き入れなさい。

① その本は私もすでにご覧になっています。

② すいません、お先にいただいています。

③ ご不明な点がございましたら、窓口でおたずねください。

④ その品物は先生が私にさしあげたものです。

